

同じ世に住ばとさても頼しははかなかりける身の思ひ哉  
今もなほ君すむかたと忍ばましいにし月の跡のしら雲  
こすの外に聞し時雨を思ひきや跡とふ袖の上にみんとは  
和歌の浦によせし鹽木の數々や朽せぬ君が形見なるらん  
神無月しぐれて過る村雲のゆくゑさだめぬ世にも在かな  
難波津の詞の花のよしあしをわけ迷ふ袖に露やおくべき

### 可觀小説卷卅七

一、元祿元年戊辰歲旦（以下皆葛巻昌興の事に係る）

たちなびく霞の末や武藏野の限りしられぬ春は來にけり  
四方の空收まる雲の八重霞わけてや春の今朝はきぬらん  
音づるゝ物とはなしに青柳のなびくにぞしる今朝の春風  
一、於駒込舊宅與直清贈答

正月廿六日與丹直清唱。直清題云。應昌興之招到駒込舊宅。

賓主相逢誰與親。問關黃鳥報青春。塙頭獨有兩松樹。不改舊陰對舊人。

拙和

遲日暖風自可親。竹林黃鳥獨知春。松風颯々破臆裏。賓主逢迎懷古人。

廿七日本郷の新居に歸り、復和前韻并蜂腰一首寄直清。  
松樹迎春自有聲。荒塙綠竹帶風清。主賓對酌聽黃鳥。莫忘閑遊詩酒情。

ともに聞くけふをいかに忍ばまし古にし宿の軒の松風

和藤昌興見寄

直清

一閑矮屋惟松聲。終日無人綠竹清。戶外黃鸝求友意。酒盃翰墨慰吟情。

又和前韻述餘意

籬外青松十里聲。主人風韻筒中清。不知今日一筵興。又惱將來幾度情。

櫻井知親次韻

遲日招尋賓主親閑。談更憶昔年春。長松不改舊時色。猶在庭前對玉人。

一、寄櫻花一枝于直清

三月十三日舊棲の櫻花盛也。折一枝寄直清并以和歌一首。

ともにみし春も軒端もふりゆけど花は昔の色香なりけり  
直清以詩報之

一樹庭櫻方簇辰。故人相送賞心新。若非君愛風流意。客裏何看滿座春。

一、能生宿主大島家の系圖

六月十一日能生御旅館にて、高德公御書を床に懸置候。年